

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名 田中 美央
学位 博士 (保健学)
学位記番号 新大院博 (保) 第28号
学位授与の日付 平成30年 9月20日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
博士論文名 在宅重度障がい児・者の親のレジリエンス
—測定尺度の開発と関連要因の検討—

論文審査委員 主査 教授 宮坂 道夫
副査 教授 定方 美恵子
副査 教授 住吉 智子
副査 教授 関 奈緒
副査 教授 久田 満

博士論文の要旨

本研究は、在宅重度障がい児・者の親のレジリエンス尺度を開発し、その信頼性および妥当性を検討するとともに、レジリエンスを高める関連要因を明らかにすることで、効果的な支援のための基礎資料とすることを目的として、3つの研究を行ったものである。研究1では、在宅重度障がい児・者の母親12名にインタビュー調査を行い、質的分析によって、レジリエンスの構成要素として4点の個人的資源（育児スキル、親としての意識、育児への見通し・希望・期待、対人的支え）、2点の環境資源（援助要請力、感情調整力）を見だし、文献検討の結果と合わせてレジリエンスの概念枠組みを得た。研究2では、この概念枠組みに基づいて開発した「重度障がい児・者の親のレジリエンス尺度」を用いて、関東甲信越地域の477名の親に無記名自記式質問紙調査を行い、妥当性と信頼性を確認し、理解と気づき、子ども自身からのエンパワーメント、専門職の活用、子ども以外の興味関心、感情調整、子どもと家族の生活の安定、援助要請の7因子構造28項目からなる尺度を作成した。研究3では、全国の599名の親を対象に自記式質問紙調査を実施し、同尺度の因子的妥当性を検証するとともに、レジリエンスに関連している可能性がある個人要因として、親の就労、通園・療育センター利用経験、周囲・仲間サポート、専門職サポート、配偶者サポート、日常的に関わる職種（訪問看護師、教師）を示唆した。これらの結果から、仲間との出会いの機会の提供、発達段階に応じた親子の関係づくりへの支援、専門職としての効果的役割が発揮できるような支援の必要性を提言した。

審査結果の要旨

1. 保健学（看護学）に貢献しうる研究意義について

わが国における重度障がい児・者の療養環境には大きな多様性があり、全国的概況が十分に把握されていない状況が続いている。医療的ケアを必要とする重度障がい児・者が増加する一方で、施策として在宅医療が指向され、必然的に療養を担う「親」が関心の対象となりつつあるのだが、それに着目した研究は遅れている。そうした中で、重度障がい児・者の親の心理的な力ともいえるべき「レジリエンス」に着目し、実証的手法によって重度障がい児・者の親のレジリエンスの構成要素を明らかにし、かれらに対する保健医療的な支援・介入の効果を測定することにも道を開く心理尺度を作成した本研究は、学術的にも社会的にも大きな意義を有するものと評価できる。

2. 論文の構成と内容について

本論文の核をなす3つの研究は、それぞれが次の研究を導く段階的な構成となっている。まず比較的少数の対象集団に詳細なインタビュー調査を行い、質的分析（および関連する先行研究の文献レビュー）を行ってレジリエンス概念の構成要素を明らかにし、それをういて尺度の素案を作成し、対象集団の規模を拡大しながらその信頼性・妥当性を他の尺度（親のウェルビーイング、対人的支えへの認識、子どもの状態〔超重症児スコア〕）を用いて検証し尺度を完成させるという、心理尺度作成研究の正当な手順を踏んだものとして高く評価される。さらに、因子分析で抽出されたレジリエンス尺度の下位尺度に関連する個人要因を明らかにする試みとして、Pearsonの相関係数、t検定、一元配置分散分析、重回帰分析等を行っている。以下に、本論文の構成に沿って、審査委員の評価を述べていく。

第1章では、研究の背景として、わが国において医療的支援によって在宅で日常生活をおくる重度障がい児・者が増加していることと、介護する立場にある親の負担やストレスに関する研究動向が概観され、本研究の中心概念であるレジリエンスについての概念規定とそれを測定するための尺度についての研究動向が述べられている。第2章では文献検討が報告され、重度障がい児・者の歴史的背景と疫学、医療的ケアの変化とライフステージの特徴、重度障がい児・者の親に関する研究動向、小児医療における障がい児・者の親のレジリエンスについての研究動向等が論じられている。この2つの章を通して、筆者は、既存のレジリエンス尺度は「乳幼児期から青年期、成人期へと長期にわたって育児・介護が継続する在宅重度障がい児・者の親の状況の把握」には適切とは言えないと主張する。研究の根幹をなすこの問題意識は的確なもので、大きな疑義を唱える審査委員はいなかった。

これに続く第3、4、5章において、それぞれ研究1（1-1および1-2）、2、3が報告されている。この部分について、審査委員は適切な手順を踏んで独自性の高い尺度開発を行ったものと高く評価しつつ、いくつかの指摘を行った。研究1については、(1)結果の記載の仕方が再現性を確保できるものになっていないのではないか、等の指摘がなされた。研究2および3については、(2)研究1で得られた「子どもの状態の安定」の位置づけが不明確ではないか、(3)尺度の対象は「親」なのか「母親」なのか（対象となった親のうち、父親はかなり少数であった）、あるいは「育児・介護をしている親」なのか（例えば育児を他人に任せている親を、実質的に育児・介護をしている親と同一視してよいか）、(4)重回帰分析の説明変数とした項目のリファレンスカテゴリーが不明瞭ではないか、等の指摘がなされた。また、全体を通して誤記や誤字脱字についての指摘も何点かなされた。これらの指摘事項のうち、特に(3)は本研究の全体的な枠組みに関わるものであるが、(a)研究目的からは父親も含めた親を対象とする尺度にすることが重要であるが、対象集団としての父親が少数かつアクセス困難であり、検証のための研究を継続することで解決したい、(b)実質的な育児・介護を行っている親が対象であることについて、尺度使用者に留意させる措置を講じる等で対処したい、等が回答された。その他の指摘事項は記載の軽微な変更によって対応された。これらの対応は、十分に妥当なものであると評価した。

3. 総括

本論文は、在宅重度障がい児・者の親のレジリエンス尺度の開発が学術的・社会的に不可欠であるとの問題意識から、文献検討と質的研究によるレジリエンス概念の構成要素の探索、統計的手法を適切に用いた尺度の開発と信頼性・妥当性の検証と、科学的に合理的な方法により研究を展開させている。成果としてのレジリエンス尺度は、在宅重度障がい児・者の親に対する支援・介入の効果の測定等への活用が期待される。本研究は、在宅重度障がい児・者の親という特定の対象およびその支援に直接的に貢献するものである一方で、人間の持つ「強さ」、「成長力」、「回復力」といったポジティブな側面に注目しているために、他の逆境に置かれた異なる対象についての研究にも大いに示唆を与えるものとなり得る。

以上より、論文審査委員5名の総意として、本論文は学位規則第4条第1項に定める博士（保健学）の学位を授与するに値する水準に達していると判定した。